

霞

—2015年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成27年7月1日発行(通巻第31号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(31) 絵葉書 「土浦尋常小学校」



明治 44(1911)年に完成した木造西洋風二階建ての校舎です。先に新築された土浦中学校校舎の建築にもかかわった塚越斧太郎が請負人となって完成しています。玄関の右手前に見える門扉は、戦時中の金属回収で供出されました。 ※校舎模型を近代コーナーに展示しています。 【情報ライブラリー検索キーワード「学校」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(31)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【夏休みファミリーミュージアム他】
- 淡い緑色の釉薬(古代)・・・2
- 埋蔵銭が語るもの(中世)・・・3
- 金葉集(近世)・・・4
- 戦時下の金属回収(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「史料との出会い」・・・8
- コラム(31)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 古墳時代箱式石棺の世界—東アジアから霞ヶ浦沿岸へ—

7月19日(日)・9月20日(日)・10月11日(日)

各日とも午後2時～(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

【夏休みファミリーミュージアム】期間:7/18(土)～8/30(日)

★★ワンポイント解説会★★ 夏季展示の見どころをわかりやすくご説明します。事前申込み不要。

7月25日、8月1日・8日・22日(いずれも土曜日) 11:00～及び14:00～の1日2回

期間中、夏季展示の展示品に関するクイズも出題します。合格者(80点以上)には記念品をプレゼントします。

★★ミニ掛軸をつくろう★★ 7/9(木)～電話または直接申込み 参加料1,000円(材料費)

第1日目(裏打ち)8月4日(火)9:30～12:00

第2日目(表装)8月8日(土)または9日(日)9:30～15:00

★★かすみ人形を作ろう★★ 7/9(木)～電話または直接申込み 参加料200円(材料費)

霞ヶ浦のタニシを材料にした「かすみ人形」を作る講座です。小・中学生親子優先。

定員(親子5組)に満たない場合、7月23日(木)から一般の方の参加も受け付けます。

8月6日(木)13:30～15:30

★★親子はたおり教室★★ 8/5(水)までに往復葉書で申込み 参加料200円

第2希望までの希望日時、住所、電話番号、親子の氏名、学年を記入。※葉書1枚につき親子1組

各回親子4組、定員を超えた場合抽選となります。

8月21日(金)・22日(土) 午前の部 10:00～12:00/午後の部 13:30～15:30



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

うわぐすり

淡い緑色の釉薬

かいゆうとうさ
— 灰釉陶器 —

今回は、日本でつくられた多様な陶磁器の中でも、現在につながる国産陶器のさきがけと位置づけられる灰釉陶器についてご紹介いたします。

灰釉陶器は8世紀後半から11世紀にわたりつくられ、その名が示すように、器の表面に草木を燃やした灰を原料とする淡い緑色の釉薬がみられます。灰白色の耐火性に優れた粘土を用いることで、登り窯^{がま}での高温焼成に耐え、釉薬の発色の良い焼き締まった陶器となっています。その生産は現在の岐阜県、愛知県、静岡県にわたり行われました。中でも、愛知県名古屋市の北東部に位置する猿投山^{さなげやま}南西麓一帯は最大の生産地で、9世紀前半に本格的な操業を開始しました。その後9世紀の終わりには生産の中心が岐阜県南東部の美濃^{みの}地域（多治見市など）や、愛知県東部の三河地域（豊橋市など）にも広がります。

このような灰釉陶器は、時期によって釉薬の施^{ほどこ}し方に変化がみられます。8世紀後半から9世紀前半のものには、窯内の灰が良くかかる場所に陶器を置くことで釉薬を施す方法があります。より新しい時期には、水で溶いた灰液を一様に陶器に付けて焼成し釉薬を施しました。この変化は生産地での製品の量産化や規格化にともなうもので、そこにはこの陶器への需要の高まりが影響しています。

土浦市内でも平安時代の集落遺跡を中心に数多くの灰釉陶器が出土しています。その中でも、市内で随一の釉薬の具合を示すものとして、八幡脇遺跡^{はちまんわき}（おおつ野）から出土した壺^{つぼ}があります。この壺は、当時の有力者が仏教信仰にもとづき火葬骨を納めた骨蔵器^{こつぞうまき}として使ったものです。一部欠けていますが、良好な状態のもので、釉薬が正面側に多く垂れ下がり（写真1）、その裏側（写真2）との違いが明瞭です。このような釉薬の特徴は、先に述べた8世紀後半から9世紀前半の灰釉陶器にみられ、平安時代の人々も釉薬の多く垂れ下がる方を正面と見立てていたのではないかと思います。

当時、八幡脇遺跡出土の壺のような淡い緑色にかがやく灰釉陶器を目の当たりにした人々は、誰しもがそれへの憧^{あこが}れを持ったものと思われます。そして、同様な憧れを持つ各地の人々の願望が、生産地での灰釉陶器の量産化や規格化へとつながっていったのかも知れません。
(関口 満)



写真1 八幡脇遺跡出土の壺の正面



写真2 同壺の裏側

8/8 (土) 11時・14時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも古代コーナーに展示)

- 入ノ上遺跡出土灰釉陶器
- 弁才天遺跡出土緑釉陶器
- 寺畑遺跡出土二彩陶器



まいぞうせん

埋蔵銭が語るもの

地中から甕や壺に入った大量の銭が見つかることがあります。一般に埋蔵銭と呼ばれています。実に数千から数万枚にも及ぶ大量の銭の発見には、驚かされます。〈大量のお金を埋める〉という行為は、どの時代にもある訳ではありません。およそ13世紀後半から16世紀後半にかけて特に見られる現象です。中世と呼ばれるこの時代、人はなぜこれほど大量のお金を地中に埋めたのか、またそこから見えてくる社会とはどのようなものだったのでしょうか。

土浦市内でも100枚以上の銭がまとまって出土した事例は、6例あります。大半が室町時代、15世紀から16世紀にかけてのもので、そのうちのひとつ、木田余町から見つかった埋蔵銭は銭が埋められた時の状態をよく留めています。銭は、高さ約27cmの土器に入れられた状態で、深さ約1mの土中から発見されました。錆びて塊となっていますが、よく見ると銭が横に連ねたようにまとまっていることがわかります。これは、藁のような植物質の紐を銭の孔に通してあるためです。このように紐を通した状態を縶まじといいます。ただまとめて紐を通すのではなく、紐に結び目を作り、一定の数量ごとに銭をまとめていることも確認できます。結び目で区切られた銭の枚数は95～97枚です。銭1枚が1文ですので100文にわずかに足りませんが、省陌法しょうびやくぼうといってこれを100文とみなすことが行われていました。これを10個つなげて合計で1000文、すなわち一貫文で一縶としていました。

貫縶かんざしと呼ばれるこの状態は、中世の絵巻物などにもみることができる、一般的な保管形態です。木田余町の埋蔵銭の場合、一縶を折り返しながら土器に入れられていました。縶から外れてしまったものもあり、正確な数はわかりませんが、約4000枚にもものぼると推測されます。

銭は、中国から輸入されたものです。中世の日本では、みずから銭を鑄造することはなく、専ら中国から輸入された銭（唐宋明銭）を使っていました。銭を使って商取引を行うことが広く一般化するのもこの時代であり、地中から発見される埋蔵銭はそうした銭の流通状況を如実に示しています。

それぞれの埋蔵銭は、その地域に富裕な人が暮らしていたことも伝えてくれます。永享7（1435）年に作成された「常陸国富有人注文」には、常陸国内の富有人（富裕者）が書き上げられており、土浦の人の名もみることができます。大量の銭を埋めた人は、こうした富裕層でしょう。大切なものを地中に埋蔵する習慣からか、大量の銭を地中に埋めたものの、何らかの事情（死亡など）で掘り返されることなく、500年もの時を越えて現代に姿を現しました。（堀部 猛）



出土した埋蔵銭（木田余町出土）
※写真は全体の3分の2程度

8/22（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 常陸国富有人注文（複製）
- 法雲寺庄主寮年貢納目録（法雲寺所蔵、茨城県指定文化財）



きんようしゅう
金葉集

—土屋家旧蔵品の秘密—

掛軸の中央に和歌が3首、仮名でしたためられています。「参議師頼」「藤原定通」と2人の詠み手が書かれています。もうひとりの作者の名が見当たりません。この掛軸は断簡といい、切断された書が表装されているのです。

奈良時代から鎌倉時代にかけて書かれた筆跡は古筆と呼ばれ、愛好されました。巻物や冊子のような長編の古筆は、切断されて伝来している例は少なくありません。「佐竹本三十六歌仙」「源氏物語絵巻」などはいずれも国宝に指定されていますが、高額なため個人では持ちきれず、分断され複数の所有者の手にわたりました。数行ずつ分断され手鑑に貼られているものもあります。

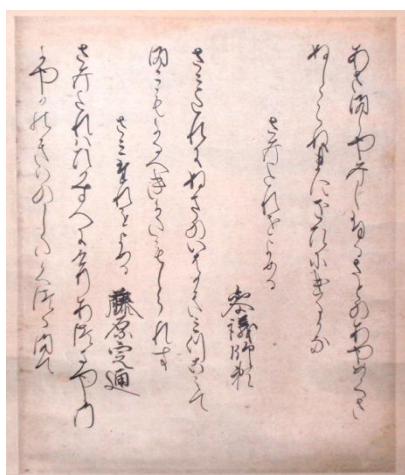
掛軸は「金葉集（金葉和歌集）」の一部です。金葉集とは、平安時代前期から鎌倉時代初期までに選定された歌集八代集の一つで、白河法皇（1053～1129）の命により源俊頼（1055～1129）が選んだ、およそ720首の和歌が掲載されています。法皇や俊頼周辺の人物の作品が多く選ばれており、清新な叙景歌や、庶民的な題材を取り上げ、奇抜な着想や表現の作品が積極的に選ばれています。

かつて土浦藩を治めていた大名土屋家が所蔵していた道具の目録「土屋蔵帳」350件の中に「金葉集一冊 後鳥羽院宸翰」があります。和綴じ本一冊が、茶の湯の書院の床飾りに用いる古筆のひとつとして所蔵されていました。「宸翰」とは天子の直筆という意味があります。

江戸から明治、大正へと時代が変わり、金葉集は土屋家の手から離れ、戦後の混乱期の昭和23（1948）年、古筆了信（1877～1953）によって分割され、多くの人が持ち合うことになりました（小松茂美『古筆学大成 第9巻』）。現在行方が確認できるのはわずかですが、その一片を土浦市が購入して現在に至っています。土屋家旧蔵の金葉集も価値のあるものゆえに切断され、断簡となって伝来する運命をたどったのです。

字形は細長く、筆運びはリズムカルで、書体は鎌倉時代に流行した後京極流とされています。

（木塚久仁子）



「金葉集」当館所蔵

【翻字】
あさましやみしふるさとのあやめくさ
わかしらぬまにをひにけるかな
さみたれをよめる 参議師頼
さみたれにぬまのいはかきみつこえて
まこもかるへきかたもしられず
さみたれをよめる 藤原定通
さみたれはひかすへにけりあつまやの
かやかのはしたくつるまで

8/1（土）11時・14時
からこのページでご紹介
した資料のワンポイント
解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも土屋家の文化コーナーに展示）

- 土屋蔵帳 江戸時代後期
- 土屋政直「福祿寿」 江戸時代中期



戦時下の金属回収

— 供出されたもの・されなかったもの —

日中戦争から太平洋戦争にかけて、戦局の悪化と物資の不足を補うためにさまざまな政策がとられました。その一つが、金属類の回収です。これは武器生産に必要な金属資源の不足を補うためのもので、任意の回収は昭和13(1938)年の呼びかけで始まっていましたが、昭和16年に法令が公布、追加や改正をかさね、役所や学校の設備・備品から家庭の銅釜、子供のおもちゃまで、さまざまなものが回収され、溶かされ軍需品の原料とされました。

そのひとつは寺の鐘です。昭和17年8月16日付けの茨城新聞には、土浦市内の梵鐘の献納期日が掲載されています。名前があがっているのは、外西町神龍寺・大岩田町法泉寺・小岩田町如宝寺・仲町千手院・真鍋町善心寺・永国町大聖寺・下高津町常福寺です。当時は、国宝などを除き元和年間(江戸時代)以降の鐘は、基本的に供出させられたといわれています。

また、写真は土浦国民学校(現土浦小学校)の門扉ですが、『土浦小学校創立百周年記念誌』に「校門も軍に献納された」と掲載されています。戦争が激しくなり、防空訓練をはじめとした各種訓練が日常的に行なわれていた昭和18年頃と考えられます。

偉人を顕彰した銅像も姿を消していきました。土浦から出馬し、茨城県最初の拓務大臣となった原脩次郎は昭和10年に、また土浦の花火大会をはじめた神龍寺の秋元梅峯和尚は昭和12年に、それぞれ銅像が建てられていました。しかし、茨城新聞社の記者であった市村壮雄一の『茶の間の土浦五十年史』によると、原の銅像は昭和19年に、梅峯和尚の銅像は昭和18年に、いずれも赤いたすきをかけて供出されています。

供出されなかった宍塚町般若寺と大手町等覚寺の梵鐘(ともに旧国宝)は、現在は国指定重要文化財となり、それぞれの境内にその姿をとどめています。土浦小学校は二度校舎の建て替えがありましたが、博物館の校舎模型がその面影をとどめています。原と梅峯和尚の銅像は、戦後胸像が復元されました。いずれも戦争の記憶を今に伝えています。

(野田礼子)



土浦国民学校の門扉と子供たち
『むかしの写真土浦』より

7/25(土) 11時・14時
からこのページでご紹介
した資料のワンポイント
解説会を開催いたします。

- 下記の資料もあわせてご覧ください。
- 銅鐘(複製、原資料は般若寺所蔵、国指定重要文化財・中世コーナーに展示)
 - 土浦小学校校舎模型(当館所蔵・近代コーナーに展示)



市史編さんだより

—明治維新期の土浦藩と仙台—

幕末に大坂城代を勤めた土浦藩主^{つちやともなお}土屋寅直とともに、大坂で活躍した土浦藩士^{ぎさきえもん}小林儀左衛門家の史料の中に、縦 85.5 cm横 135.5 cmの大きな絵図があります。「陸前^{とくだ}遠田^{とだ}登米^{とめ}志田^{した}三郡^{さんぐん}図」(小林家文書史料番号 469、以下「小林家 469」と略す)と書かれたこの絵図は、村名等も書き込まれた彩色の美しいものです。土浦と仙台の関係を調べていくと、短期間ではありますが土浦藩士が仙台に在駐したことがわかってきました。

慶応 4 (1868) 年 5 月の戊辰戦争に際し、東北・北陸諸藩は奥羽越列藩同盟を結び、会津藩征討を命じた維新政府に抵抗しました。この同盟は脱落する藩が相次ぎ、結局同年 9 月に会津落城^{がかい}で瓦解しました。「(奥州越前の所置につき書上)」(小林家 462) と「(松平容保等の所置に関する宸断^{しんだん}につき書状)」(小林家 639) によると、明治元(1868)年 12 月 7 日に会津藩主松平容保や南部藩主^{なんぶとしつな}南部利綱とともに仙台藩主伊達陸奥守(慶邦)は 62 万 5600 石を召上げられ、父子ともに東京にて謹慎を命じられました。同時に慶邦の「血縁のもの」に対して 28 万石が^か下賜され、仙台藩は半分以下に^{げんぼう}減封されたことになりました。

『宮城県史 2 (近世史)』・『宮城県史 3 (近代史)』・『登米郡史 上巻』の記載によれば、召上げられた仙台藩領は、盛岡藩・宇都宮藩・高崎藩・土浦藩が取締地としました。土浦藩が取締地としたのは、登米郡 24 村・遠田郡 58 村・志田郡 21 村の合計 103 村 12 万 8800 石余で、明治元年 12 月から同 2 年 8 月の約 8 ヶ月間のことです。同地域は栗原郡 40 村を加えて明治 2 年 8 月 7 日に登米県となり、さらに明治 3 年 9 月 28 日に石巻県に編入、明治 4 年 11 月 2 日に仙台県に編入されました(登米郡・本吉郡と栗原郡 40 村は一関県に移管)。

明治元年 12 月に土浦藩の取締地に編入された後、2 年 3 月に土浦藩士 64 名が遠田郡^{わくや}涌谷に入り、旧館を本庁として涌谷県が設置されました。権知^{ごんち}県事には奥田^{おくだ}図書(土浦藩家老などを歴任した重臣、代官から権知県事となる)、権判^{ごんぱん}県事には渡邊^{わたべ}整作(郁文館^{くとうし}句読師や文武館掛を勤め、剣術免許を持つ)などが着任しました。

約 8 ヶ月しか存在しなかった土浦藩取締地ですが、『茨城県史料 維新編』に収録されている「^{こうぶんろく}公文録」にも登米県について 3 点の史料があります。公文録は、現在の国立公文書館の内閣文庫の中に収録されている明治元年から同 18 年までの文書群で、明治政府が数多くの公文書類を整理保存する事業を進めたことにより成立しました。1 点目は土浦藩陸前国取締所調役野崎孫太郎を明治 2 年 8 月 29 日に登米県役所にて権大^{ごんだい}属に仰せ渡した届け、2 点目は同年 11 月 2 日それぞれ旧土浦藩士である土浦藩陸前国取締所権判^{ごんぱん}県事渡邊^{わたべ}整作・書記大谷^{おほや}節之助^{ひつせい}・筆生星野謙太郎^{ほしほ}・筆生入江改之助^{ししゅう}・捕亡^{ほぼう}野口永次郎が登米県大属・県少属・県権少属・県史生・県出仕になった届け、3 点目は同年 11 月 13 日土浦藩取締所である陸前国遠田郡・志田郡・登米郡が登米県の管轄となり、同県鷲津宜光権知事(旧名古屋藩士)へ 10 月 12 日までに地所諸帳面の引渡し済み、権知^{ごんち}県事奥田^{おくだ}図書などの官員が帰藩したことの届けです。登米県になり権知事が鷲津宜光に交代した後も 2 点目の史料で任命された渡邊整作などは大属などの役職として残っています。

「東京城日誌第十二月七日御布告書写(陸奥・出羽二国分国につき)」(小林家 638) には、取締を命じられた藩主に対する沙汰書があり、戦乱で苦しんだ人民を撫育^{ぶいく}するため民政に通じた家来を派遣することが命じられています。土浦藩から派遣された藩士全員の履歴や人選方法の詳細は不明ですが、県権少属となった星野健太郎は父が羽州代官を勤めた人でした。土浦藩が維新期に仙台藩の旧領地を預かることになった背景には、土浦藩が天童地域を飛地支配していたことが関係していたのでしょう。

(市史編さん係非常勤職員 江島万利子)

地域と博物館

博物館をつくる（４） ～必要なこと～

今回は、博物館をつくるにあたって必要なことについてお話しします。何が必要か、博物館に必要なものというだけでなく、もう少し広い意味で博物館づくりに欠かせない考え方、取り組み方という観点でご紹介します。

資料保存のために、環境の整った収蔵庫や展示室は、博物館の生命線と言ってもよいほど大切なものです。常に温度・湿度を管理し、資料に適切な環境を維持するには、空調設備やエアタイト（密閉）型の展示ケースなど専用の設備や特殊構造の施設が必要になります。伝統的な木造建築であれば、木や土の壁が相応の空調機能を発揮しましたが、コンクリート造りの現代の博物館では温湿度調整は機械空調に頼らざるを得ません。とくに環境の影響を受けやすい繊細な資料については、温湿度を常に一定に保てる恒温恒湿（24時間空調）の収蔵庫も必要です。また、博物館では、資料に対する水や光の影響にも注意が必要です。当館が壁に囲まれ、窓の少ない閉鎖的な外観になっているのも直射日光の影響を少なくするよう配慮したためです。また、低地帯にある土浦では地下水の影響も懸念され、当初から防水処置とともに地下には収蔵庫や展示室は作らない方針で設計しました。

このように、博物館にはまずなによりも、資料保存に対する配慮が必要ということになります。良い博物館をつくるには経験が必要とよく言われるのもそのため、博物館の基本構想を考え指揮する学芸員だけでなく、設計や施工を行う専門業者にも博物館づくりに対する経験と知識が求められています。博物館づくりを二度、三度経験すると、良い博物館ができると言われてきました。ただ、実際に博物館をつくる機会のごく限られており、何度も経験できるものではありません。当館では設計から施工の要所々々で、博物館の指導的立場にあり、資料保存の研究も進めている文化庁や東京文化財研究所に指導いただき、その蓄積された経験と技術に学びながら博物館づくりに取り組みました。

博物館をつくるには、豊富な収蔵資料や展示資料が必要と言われます。確かに、まとまった資料のコレクションがあつてつくられた博物館や、眠っている資料群の公開活用のためにつくられた博物館など、資料あつての博物館づくりという傾向は認められます。ただ、資料がなければ博物館をつくる必要がないかという、そうではないと言えるでしょう。当館が開館27年を過ぎて言えることは、博物館がつくられたことによって、調査研究が進展し、それに伴い多くの資料が博物館に集積されるなど、博物館が存在することによるプラスの側面が大きいということです。これによって、くり返し新たな展示や情報が発信され、さらなる資料収集や情報の蓄積が図られるといった、地域文化の好循環が生まれることが期待されます。

（塩谷 修）



開館時の収蔵庫（今は、資料で満杯です）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、江戸時代の土浦の産業、醤油醸造について、「醤油屋仲間証文帳」や「家事志」を史料として卒業論文をまとめられた、市内ご在住の白川悦子さんに寄稿していただきました。

史料との出会い

「^{しょうゆ やなか ましゅうもんちょう}醤油屋仲間証文帳」は明和2（1765）年から昭和23（1948）年までの約180年間、土浦の醤油造家たちが書き継いできた仲間（組合）の活動の記録です。市の文化財でもあるこの史料は土浦市立博物館で翻刻されて市立図書館の郷土資料棚に置かれ、私たちは容易に読むことが出来ます。200頁ほどのそれは地味な薄茶色の表紙で目立たない本ですが、私にとって大切な一冊です。

私は慶應義塾大学の通信課程で史学を専攻していましたが、愛着のある土浦をテーマに卒業論文を書きたいと考えていました。江戸時代の関東に誕生した多くの醤油産地には、大躍進を遂げて現代に至る野田や銚子がある一方で、消えてしまった産地も少なくありません。土浦の醤油は品質の良さで江戸でも評判となり、野田や銚子に並ぶ名産地としての時期があったことを知り、是非これについて書きたいと思いました。

土浦の醤油醸造業に関する史料は残念ながら今のところ少ないようですが、そんななか「醤油屋仲間証文帳」はたいへん貴重な存在だと思います。ここに書かれた記録を全て内容別に整理し、180年間に登場した醤油造家についても仲間加入期間を図に表すなどして、醤油産地土浦の変遷をたどる手段としました。

また色川^{いろかわ}三^み中の日記「^{かじし}家事志」においては、江戸期土浦の代表的な醤油造家であった色川家と国分家^{こくぶん}の関係が見え、興味深く書き進めることができました。こうした史料のおかげで卒業論文は完成し、今年3月、私は親子ほどの年齢差がある大勢の若者たちに混じって卒業式に出席できた次第です。

博物館、そして図書館には、これからも活発な活動によって歴史も含めた土浦の様々な魅力を知る機会を、私たちに提供していただけることを願います。
(土浦市在住 白川悦子)

コラム(31) ー歴史研究者の助言ー

「色川^{いろかわ}三^み中^なが『地域派国学者』と^{とら}捉えてみてはどうか？」と、宮地正人先生（近現代史研究 東京大学名誉教授・元国立歴史民俗博物館長）がおっしゃったのは、平成26年12月、第36回特別展「次の世を読みとくー色川三中和幕末の常総」の準備を進めている最中でした。三中ら常総の国学者は、^{かたのあずまろ}荷田春満、^{かものまぶち}賀茂真淵、^{もりのりなが}本居宣長、^{ひらたあつたね}平田篤胤ら国学の正統派とは流れを異にすることから、博物館では「無学派」と表現していましたが、宮地先生は「地域派」とくくるところを提案して下さいました。博物館ではこれを展示構成に活かしました。平成27年4月25日(土)「色川三中をめぐる江戸と地域の文化人たち」と題した講演を「色川三中の国学なるものは国学の正統派らとどのような距離関係にあるか」という疑問を、この機会に少なくともわたくしが納得できる形であきらかにしたいという気持ちがあった」と始め、国学研究における三中の高い理想と幅広い人脈を余すところなく語って下さいました。

何度もご来館して下さった宮地先生とのお話のなかで、博物館職員^{くわ}の心に強く残った言葉があります。「史料をしっかりと銜えることが(論よりも)大切」、地域博物館として活動を進めていく方向を示していただいた気がしています。
(木塚久仁子)

情報ライブラリー更新状況

【2015・7・1現在の登録数】

古写真 547点 (+5)
絵葉書 454点 (+5)

※()内は2015年5月12日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2015年度
夏季展示室だより(通巻第31号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2015年度夏季展示は、2015年7月1日(水)~9月27日(日)となります。「霞」2015年度秋季展示室だより(通巻第32号)は2015年10月1日(木)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。(カラー)